

第2章

大学での学修実感の類型と入学から卒業後のキャリアまでの関連

1. 分析の目的

本学における卒業生調査は、本学での学びと卒業後のキャリアや生活との関係を知ることが目的としている。

本調査の結果については、過去2年間で一歩踏み込んだ分析を行ってきた。平成30(2018)年度の報告では、平成28(2016)、平成29(2017)年度実施の回答データを対象に、学生時代にどのようなことに意欲的に取り組んでいたのかの類型化を試み、見出された7つの類型ごとにそれぞれの特徴や学修実感の違いを検討した¹。令和元(2019)年度の報告では、平成28(2016)～平成30年度実施の3年間の回答データをとりまとめ、学部卒業時の学修実感を起点として分析を試みた。結果として、3つの学年の間に学修実感の違いはみられず、学修実感による群分けは高・中・低の3つが見いだされた。学修実感が高いほど、学生時代の学習時間が長くさまざまな活動に意欲的で、学生生活への満足度が高かったことや、就職後の仕事への満足度が高いこと、知識や能力の身につき実感の差は卒業時点と比較して縮まってきつつも、卒業5年後時点においても保たれていることなどがわかった²。

今回分析対象とする令和元年度実施の卒業生調査では、本学での学びと卒業後のキャリアや生活との関係を知る目的に照らしながら、回答者の負担軽減との両立をねらい、質問紙をスリム化した。

¹ https://www.univ.gakushuin.ac.jp/about/enq_graduates_2017-2.pdf

² https://www.univ.gakushuin.ac.jp/about/enq_graduates_2018-2.pdf

2. 学修実感による類型化

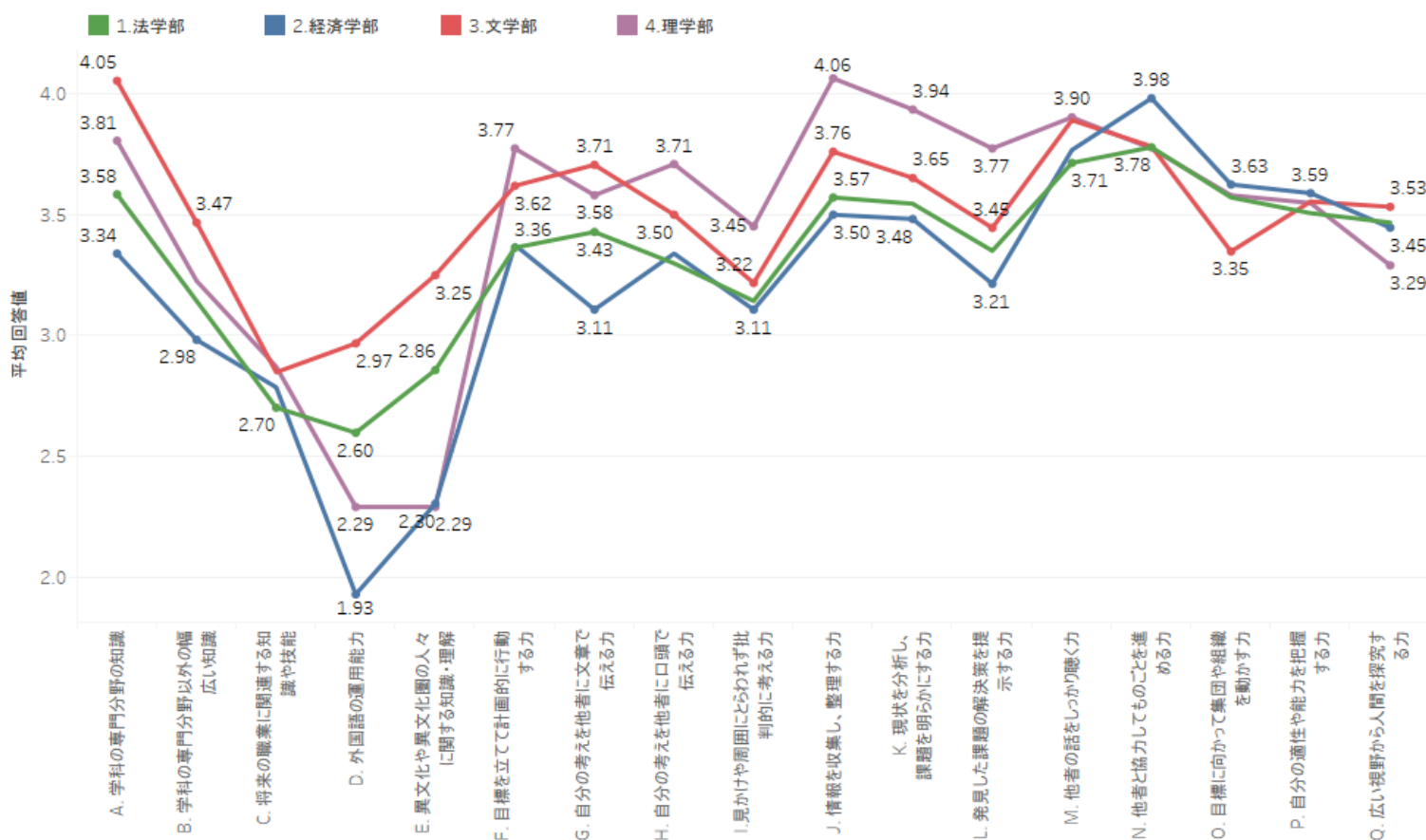
前年度の報告書では、平成 28～平成 30 年度実施の 3 年間の回答データを取りまとめ、「大学卒業段階で、あなたは、以下に示すような知識・能力をどのくらい身につけることができたと思いますか。」として学修実感を問う設問において、各項目に学年・学部による差が見受けられなかったことを受けて、学修実感による回答の類型化を行った。

今年度においても、まず大学卒業段階の学修実感について検討したい。ただし、令和元年度から質問紙を大きく変更したことに伴い、今回の分析対象は令和元年度実施分（平成 25 年度学部卒業生）のみとする。

2-1. 卒業した学部による学修実感の違い

卒業した学部によって知識・能力の学修実感の得られ方に違いがあるかを検討する。図 2-1-1 は Q5 「あなたは、大学入学から大学卒業までに、以下の知識・能力をどのくらい身につけることができましたか。」の 17 項目の学部別平均値をグラフにしたものである。

図 2-1-1



項目ごとに学部を要因とした分散分析を行ったところ、以下の4点で有意な差が認められた。

- ・ A.「学科の専門分野の知識」で、文学部が法学部・経済学部よりも高い学修実感を得ていた。
- ・ D.「外国語の運用能力」で、文学部が法学部・経済学部よりも高い学修実感を得ていた。
- ・ E.「異文化や異文化圏の人々に関する知識・理解」で、文学部が経済学部・理学部よりも高い学修実感を得ていた。
- ・ G.「自分の考えを他者に文章で伝える力」で、文学部が経済学部よりも高い学修実感を得ていた。

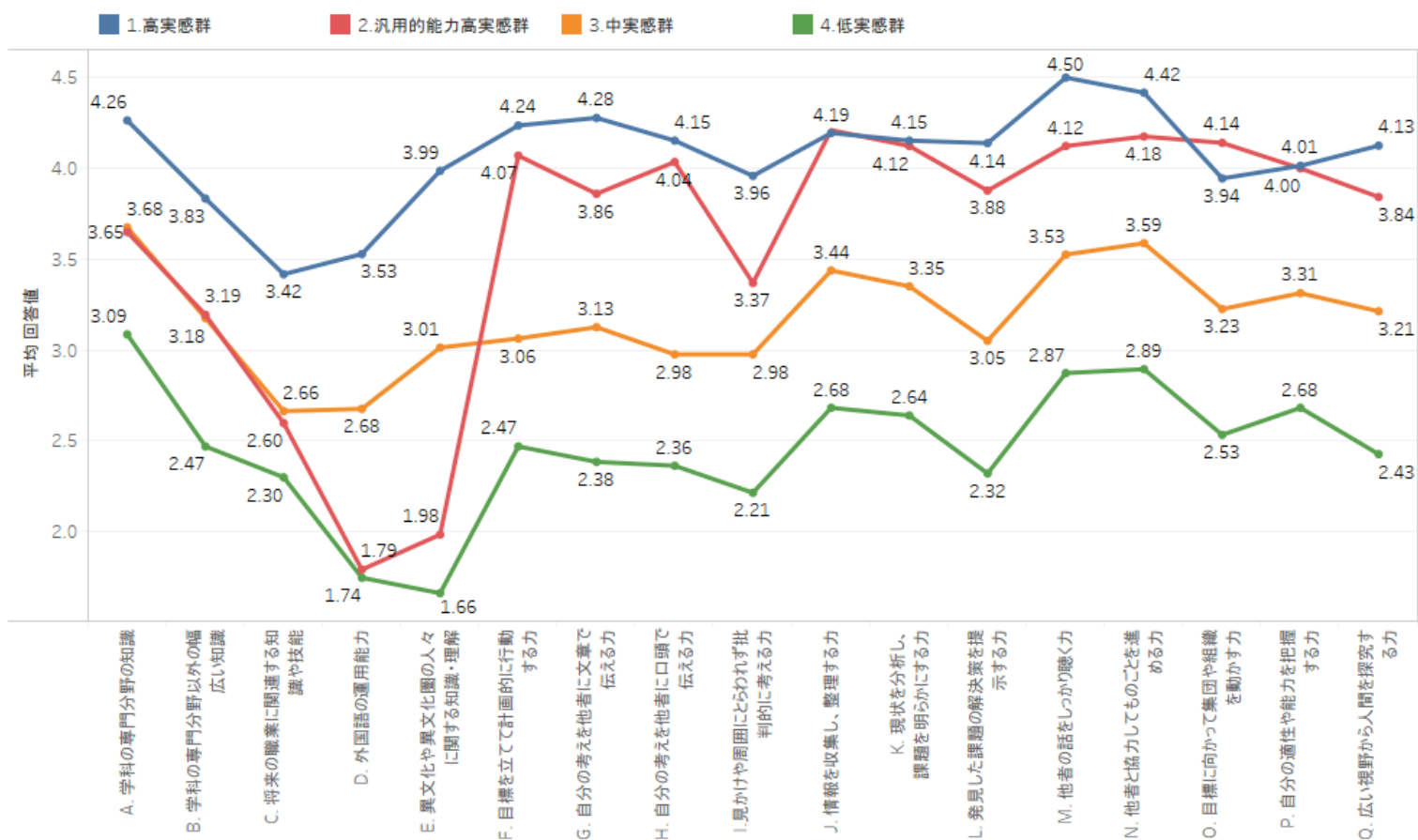
文学部は、外国語や異文化に関する学科を多く有することや、卒業論文の提出が必須であることから、これらの項目の学修実感を他学部よりも比較的高く感じやすいことは納得のいくことである。しかし、その他の13項目では学部間に有意な差はみられず、特にF.～Q.の汎用的な能力項目では、全ての学部で平均が3.0を超えていた。このことから、どの学部も一定程度の学修実感を得た卒業生が多く回答したことがうかがえ、能力の学修実感はその学部においても概ね同様の傾向であると考えられる。

2-2. 学修実感による類型化

2-1 で学部間に大きな差がみられなかったことを踏まえ、今年度も前年同様、卒業時の学修実感の回答値を用いて卒業生のタイプを類型化することとした。類型化には Q5 で訊ねた 17 項目を用い、非階層的クラスタ分析 (k-means 法による) を行った。

結果として、4 つのクラスタに分けることで特徴がみられたと判断した。図 2-2-1 はクラスタごとに Q5 で訊ねた 17 項目の回答平均値をグラフ化したものである。第 1 クラスタには 72 名、第 2 クラスタには 57 名、第 3 クラスタには 80 名、第 4 クラスタには 47 名の対象が含まれていた。

図 2-2-1



各クラスタの特徴を検討するため、クラスタを要因とした分散分析を項目ごとに行ったところ、次のような結果がみられた。

まず、第 1 クラスタ、第 3 クラスタ、第 4 クラスタの 3 群間では、C. 「将来の職業に関連する知識や技能」を除く 16 項目で「第 1 クラスタ > 第 3 クラスタ > 第 4 クラスタ」の順に有意差がみられた (C. においては第 3 クラスタと第 4 クラスタの間に差がみら

れなかった)。この結果から、第1クラスを「高実感群」、第3クラスを「中実感群」、第4クラスを「低実感群」とした。

次に第2クラスについて、高実感群との比較を見たところ、高実感群の方が高い実感を得ていたのは、A.「学科の専門分野の知識」、B.「学科の専門分野以外の幅広い知識」、C.「将来の職業に関連する知識や技能」、D.「外国語の運用能力」、E.「異文化や異文化圏の人々に関する知識・理解」、I.「見かけや周囲にとらわれず批判的に考える力」、M.「他者の話をしっかり聴く力」であった。

また、第2クラスと中実感群とを比較したところ、A.、B.、C.では2群間の差はみられず、D.、E.においては中実感群の方が高い実感を得ていた。残りの項目F.～Q.では、I.以外の全ての項目で第2クラスの方が高い実感を得ていた（I.においては2群間に差がみられなかった）。

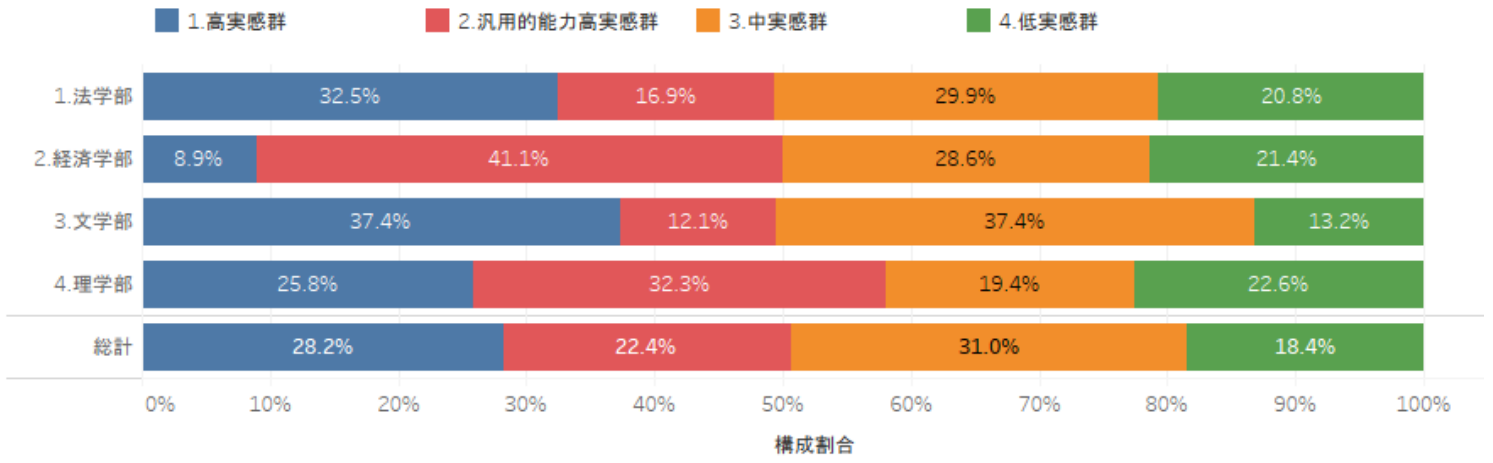
第2クラスと低実感群を比較したところ、A.、B.では第2クラスの方が高い実感を得ており、C.、D.、E.では差がみられなかった。残りの項目F.～Q.では、全ての項目で第2クラスの方が高い実感を得ていた。

これら第2クラスと他3群の比較の結果を踏まえて、第2クラスを「汎用的能力高実感群」とした。「汎用的能力高実感群」は、学科の専門分野の知識や専門分野以外の幅広い知識は中実感群と同程度に、外国語の能力や異文化理解は低実感群と同程度に、F.以降の多くの汎用的な能力は高実感群と同程度に身につけることができたと感じていた。

また、卒業した学部ごとの構成割合を確認したところ（図2-2-2）、全学の傾向と比較して、経済学部では高実感群の割合が少ないが汎用的能力高実感群の割合は多く、文学部では汎用的能力高実感群の人数割合が少ないという結果であった。両学部とも、高実感群と汎用的能力高実感群の合計は約50%を占めており、経済学部では外国語科目が必修でないため、外国語の運用能力や異文化理解の実感が低い汎用的能力高実感群に含まれる卒業生の割合が高まったと思われる。

以降では、一部の学部でクラスに偏りがあることを踏まえつつ、それぞれのクラスが入学から卒業までにどのような学習経験をし、卒業後にどのようなキャリアを歩んでいるのかを他の設問への回答から検討することとする。

図 2-2-2



2-3. 入学に影響を与えた要因、志望度と学修実感

ここからは、主に入学から卒業までの学生生活関連の設問への回答について、前段で述べた4つの群間の回答傾向の違いを検討していく。

Q1「入学にあたって、以下の項目にどのくらい影響を受けましたか。」では、入学にあたって受けた影響について9項目に分け、4.とても影響があった～1.全く影響がなかったの4件法で訊ねている。これら9項目で、群によって回答傾向の違いがみられるかを検討した。

図 2-3-1



図 2-3-1 は、Q1 への群別の回答平均値をグラフ化したものである。

分散分析の結果、まず、いずれの群間にも差がみられなかったのは、1.「入試の難易度・偏差値が合っている」、6.「就職状況がよい」、7.「キャンパスの立地がよい(通いやすさ)」、9.「滑り止めとして」であった。

差がみられた項目を見ていくと、2.「学びたい学部・学科がある」では、高実感群が中実感群・低実感群よりも有意に高かった。3.「教授・講師陣に魅力がある」と8.「社会に出てから役立つ教養が身につく」では、低実感群が他の3群よりも有意に低かった。4.

「在校生・卒業生に魅力がある」では、低実感群が高実感群・汎用的能力高実感群よりも有意に低かった。また5.「伝統がある」では、低実感群が、汎用的能力高実感群よりも有意に低かった。

群同士の差に注目すると、高実感群と汎用的能力高実感群の間、また、汎用的能力高実感群と中実感群の間では、どの項目にも差がみられなかった。高実感群と中実感群の間では差がみられたのは2のみであった。したがって、これらの群間には入学時の影響はほとんどなかったといえる。低実感群のみ、他の群との差がみられる項目が散見された。

以上のことから、高実感群は学びたい学部・学科を比較的強く定めて入学した群であり、汎用的能力高実感群、中実感群とも、入学時に影響を受けた要素はほとんど変わらなかったことがうかがえる。低実感群のみ、教授・講師陣の魅力や社会に出てから役立つ教養などをはじめとした本学の内容から受ける影響に乏しく、大学への期待が薄い群であった可能性が考えられる。

またQ2では、「出願時の学習院大学の志望度はどれくらいでしたか。」として、出願時の志望度について、第一志望、第二志望、第三志望以下の3つで訊ねている。この質問で、群によって回答傾向に偏りがあるかを検討した。

図 2-3-2

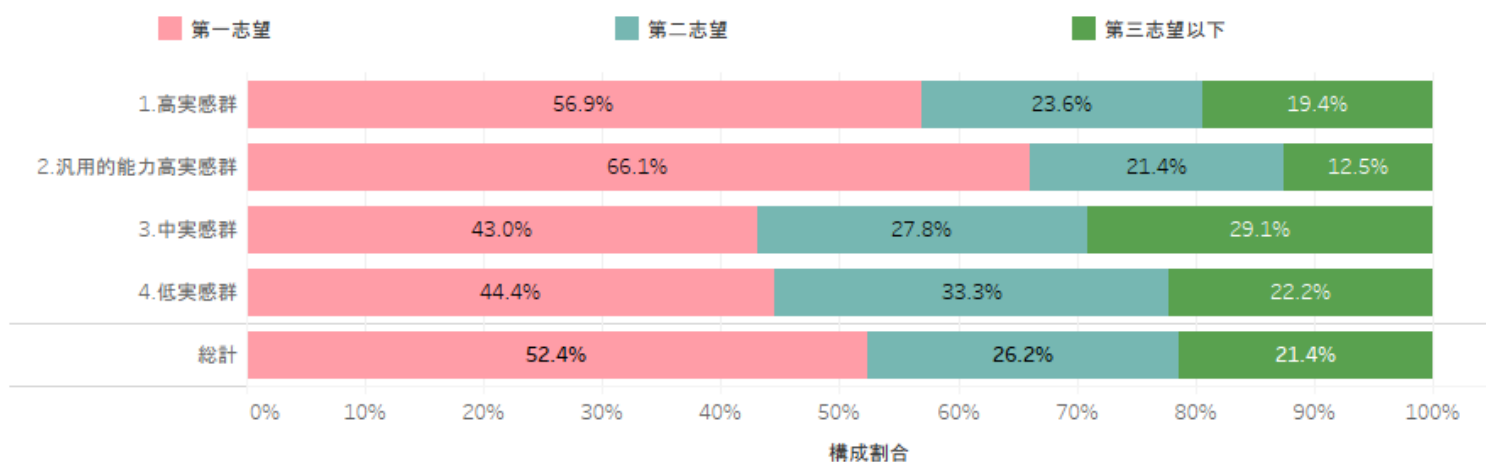


図 2-3-2 は、学修実感の群ごとに、出願時の志望度の構成割合を示したものである。群別に構成割合を確認したところ、全体的な傾向と比較して統計的な偏りはみられなかった。したがって、どの群においても、第一志望から第三志望以下のいずれも一定の割合で含まれており、出願時の志望度と卒業時の学修実感には関連性はみられなかった。

2-4. 大学時代の各種活動に対する意欲と学修実感

Q3「あなたは、大学の授業やその他の学習などにどのくらい意欲的に取り組みましたか。」では、大学の授業やその他学習・課外活動等に対する意欲について14項目に分け、4.とても意欲的だった～1.全く意欲的でなかった、0.経験しなかったの5件法で訊ねている。これらの各項目で、群によって回答傾向に違いがみられるかを検討した。

図 2-4-1

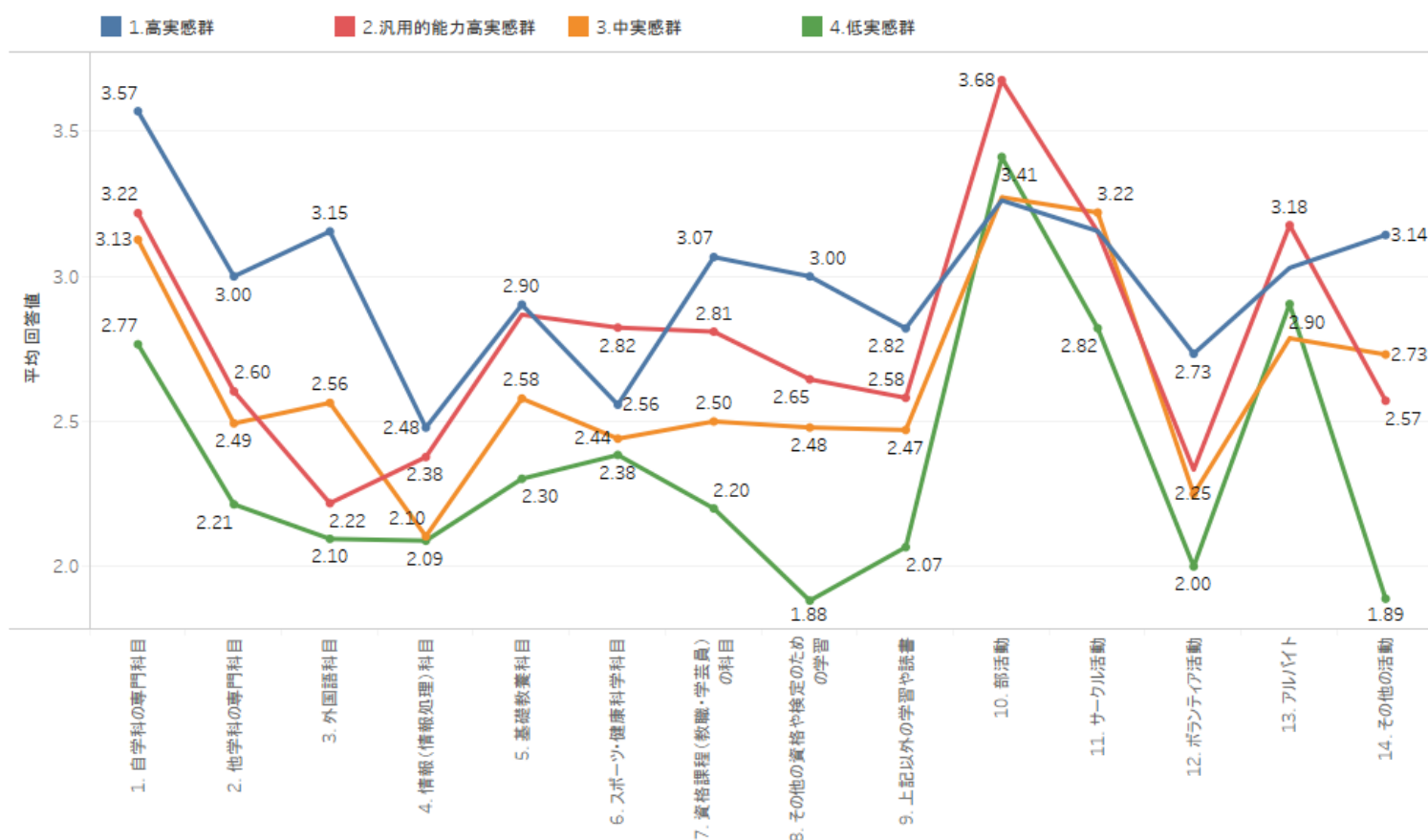


図 2-4-1 は、Q3 への群別の回答平均値をグラフ化したものである。

分散分析の結果、いずれの群間にも差がみられなかったのは、4.「情報(情報処理)科目」、6.「スポーツ・健康科学科目」、7.「資格課程(教職・学芸員)の科目」、10.「部活動」、11.「サークル活動」、12.「ボランティア活動」、13.「アルバイト」、14.「その他の活動」であった。

差がみられた項目を見ていくと、1.「自学科の専門科目」、2.「他学科の専門科目」では、高実感群が中実感群・低実感群よりも有意に高かった。3.「外国語科目」では、高実感群が他3群よりも有意に高かった。8.「その他の資格や検定のための学習」および9.「上記以外の学習や読書」では、高実感群が低実感群よりも平均値が高く、5.「基礎教養科目」では、高実感群・汎用的能力高実感群が低実感群よりも有意に高かった。

群同士を比較して述べると、汎用的能力高実感群と中実感群の間、中実感群と低実感群の間には、全ての項目で差がみられなかった。高実感群と汎用的能力高実感群の間で差がみられたのは3のみであったが、高実感群と中実感群では1.~3.で差がみられた。高実感群と低実感群では、1.~3.に加えて5., 8., 9.でも差がみられた。汎用的能力高実感群と低実感群で差がみられたのは、5のみであった。

経験しなかった(0.)と回答した人数割合(表2-4-2)をみると、8.、9.、12.に経験者数の偏りがみられた。低実感群で経験者が少なかったのが8.および9.であり、高実感群で経験者が多かったのが9.および12.であった。

表 2-4-2

項目内容	1.全体高実感群	2.汎用的能力 高実感群	3.全体中実感群	4.全体低実感群
1. 自学科の専門科目	0.0%	1.8%	1.3%	0.0%
2. 他学科の専門科目	6.9%	7.0%	6.3%	10.6%
3. 外国語科目	1.4%	3.5%	2.5%	10.6%
4. 情報(情報処理)科目	1.4%	7.0%	3.8%	4.3%
5. 基礎教養科目	0.0%	7.0%	3.8%	6.5%
6. スポーツ・健康科学科目	27.8%	40.4%	25.3%	44.7%
7. 資格課程(教職・学芸員)の科目	58.3%	63.2%	67.5%	78.7%
8. その他の資格や検定のための学習	30.6%	45.6%	40.0%	63.8%
9. 上記以外の学習や読書	6.9%	24.6%	15.0%	36.2%
10. 部活動	41.7%	40.4%	58.2%	63.8%
11. サークル活動	55.6%	53.6%	37.5%	40.4%
12. ボランティア活動	58.3%	78.2%	75.0%	87.0%
13. アルバイト	5.6%	10.5%	6.3%	10.6%
14. その他の活動	58.8%	74.6%	66.7%	80.0%

以上のことから、高実感群は、何らかの授業科目で他の群より意欲的に取り組んでいたと回答した群であり、その違いは、汎用的能力高実感群と比較して1項目、中実感群と比較して3項目、低実感群と比較して6項目であった。学修実感の差が広がるほど、意欲に差が現れる授業科目やその他の学習の種類が多くなっており、学修実感と意欲の関連性が確認できたといえる。

また、高実感群と汎用的能力高実感群では、外国語科目でのみ意欲の高さに違いがあったが、経験しなかった者の割合には違いがみられなかった。汎用的能力高実感群は、外国語科目を必修としていない経済学部が多い群であったが、必修でなくとも多くが自発的に外国語科目を履修したこと、しかし結果的に取り組み意欲を高く保てなかったことを示唆している。前に述べたように、この2群間では外国語の運用能力の学修実感に大きな差がみられ、科目を受講する際の意欲によって学修実感が高まる可能性が考えられる。

しかし同時に、汎用的能力高実感群・中実感群・低実感群の3群間に、外国語科目における意欲の違いはみられなかったため、学修実感の高低と意欲が比例関係にあるという結果とは必ずしもいえない。その他の設問での回答傾向の違いも複合的に捉えていく必要がある。

2-5. 大学時代の学び方と学修実感

本調査のQ4「あなたは、大学在学中、どのような学び方をしましたか。」では、大学生活における学び方について10項目に分け、4.とてもあてはまる～1.全くあてはまらないの4件法で訊ねている。これらの各項目で、群によって回答傾向に違いがみられるかを検討した。

図 2-5-1

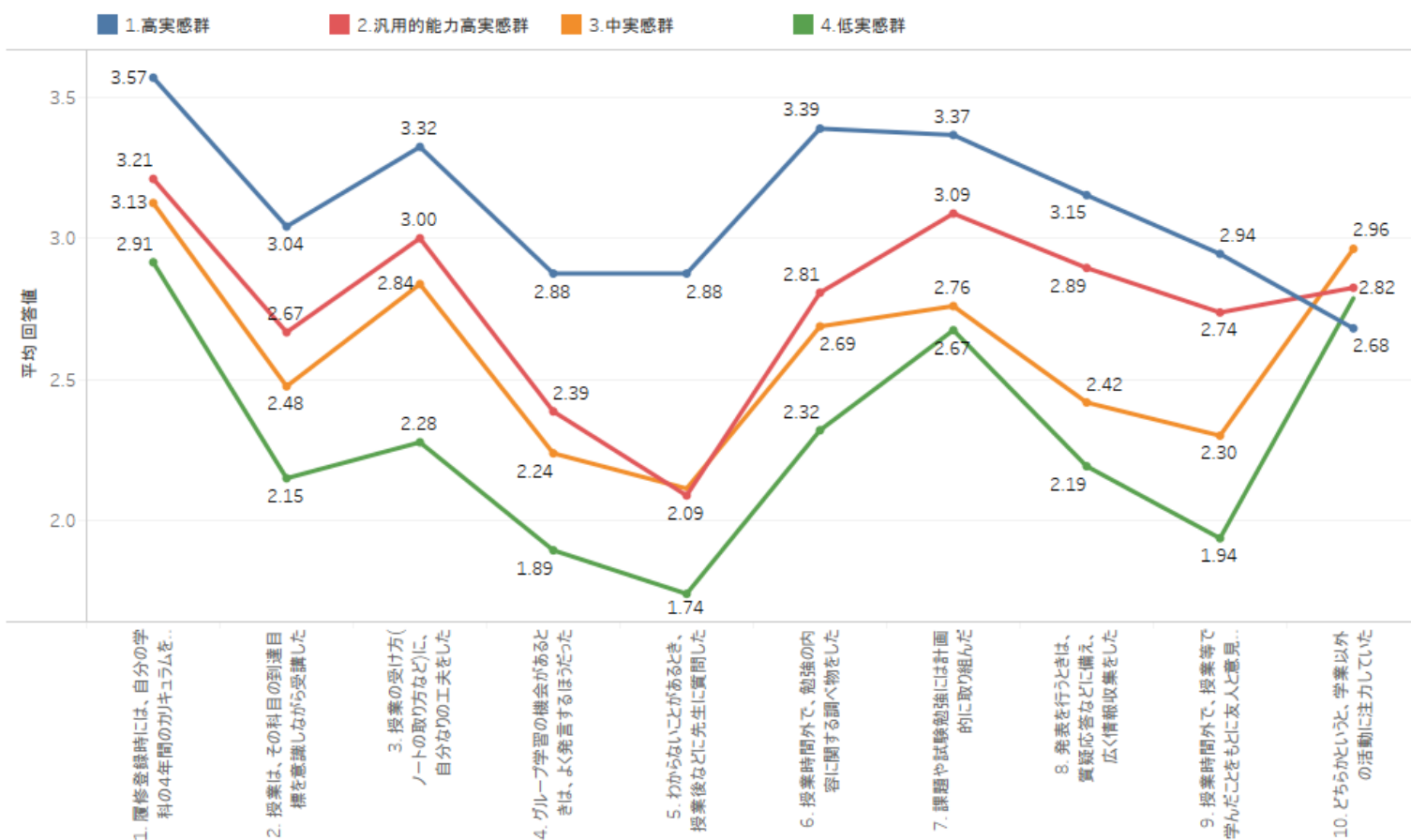


図 2-5-1 は、Q4 への群別の回答平均値をグラフ化したものである。

いずれの群間にも差がみられなかったのは、10.「どちらかという、学業以外の活動に注力していた」のみであった。したがって、学生時代、学業以外の活動に重心をおいていた卒業生はどの群にも一定程度含まれており、この結果は2-4-1において課外活動への意欲では群間の差がみられなかったことと一致するものである。

差がみられた項目を見ていくと、1.から9.の全てで、高実感群が中実感群・低実感群よりも有意に高かった。そのうち4.「グループ学習の機会があるときは、よく発言するほうだった」、5.「わからないことがあるとき、授業後などに先生に質問した」、6.「授業時間

外で、勉強の内容に関する調べ物をした」では、汎用的能力高実感群との比較でも高実感群が高かった。

8.「発表を行うときは、質疑応答などに備え、広く情報収集をした」では、汎用的能力高実感群が中実感群・低実感群よりも高く、3.「授業の受け方(ノートの取り方など)に、自分なりの工夫をした」、9.「授業時間外で、授業等で学んだことをもとに友人と意見交換や議論をした」では、汎用的能力高実感群が低実感群よりも高かった。3.では、中実感群と低実感群の間にも差がみられた。

以上のことから各群の学び方をまとめると、まず高実感群は1.から9.に挙げた学び方を、他の群よりも自覚的に行っていたといえる。また、高実感群と汎用的能力高実感群の違いは、グループ学習における積極的な発言や、教員への質問、授業時間外での調べ物を特に行っていたことにあり、これらの行動が学科の専門分野の知識や批判的に考える力などの身につつき実感の違いに現れているのかもしれない。

汎用的能力高実感群は、7.「課題や試験勉強には計画的に取り組んだ」では、高実感群と同程度に高く回答していた。しかし、1.「履修登録時には、自分の学科の4年間のカリキュラムをしっかりと確認した」、2.「授業は、その科目の到達目標を意識しながら受講した」、7.「課題や試験勉強には計画的に取り組んだ」、10.「どちらかという、学業以外の活動に注力していた」では、高実感群とも中実感群・低実感群とも、どちらの比較でも差がみられなかった。全体として、汎用的能力高実感群は高実感群と中実感群・低実感群の中間に位置しており、積極的な学習に向けてもう一歩踏み込む余力を残していた可能性がうかがえる。

中実感群・低実感群は、高実感群に比べるとしっかりと学んだ自信が持てていないグループである。2-4で検討した大学時代の各種活動に対する意欲では、中実感群・低実感群はともに、高実感群に比べて専門科目や外国語科目での意欲が低かった傾向があり、さらに学び方においても自信を持てていないことが重なって、学修実感の差に影響している可能性がある。さらに低実感群は基礎教養科目やその他の自発的学習への意欲も低く、また学び方においては授業の受け方への自分なりの工夫に中実感群と比べても自信がないことが、学修実感をより得にくくしていることが考えられる。

2-6. 大学時代の環境や学生生活の満足度と学修実感

本調査のQ6「あなたは、大学時代の環境や学生生活にどの程度満足していますか。」では、大学時代への満足度を10項目に分け、4.とても満足している～1.全く満足していない、0.判断できるほど体験しなかったの5件法で訊ねている。これらの各項目で、群によって回答傾向に違いがみられるかを検討した。

図 2-6-1

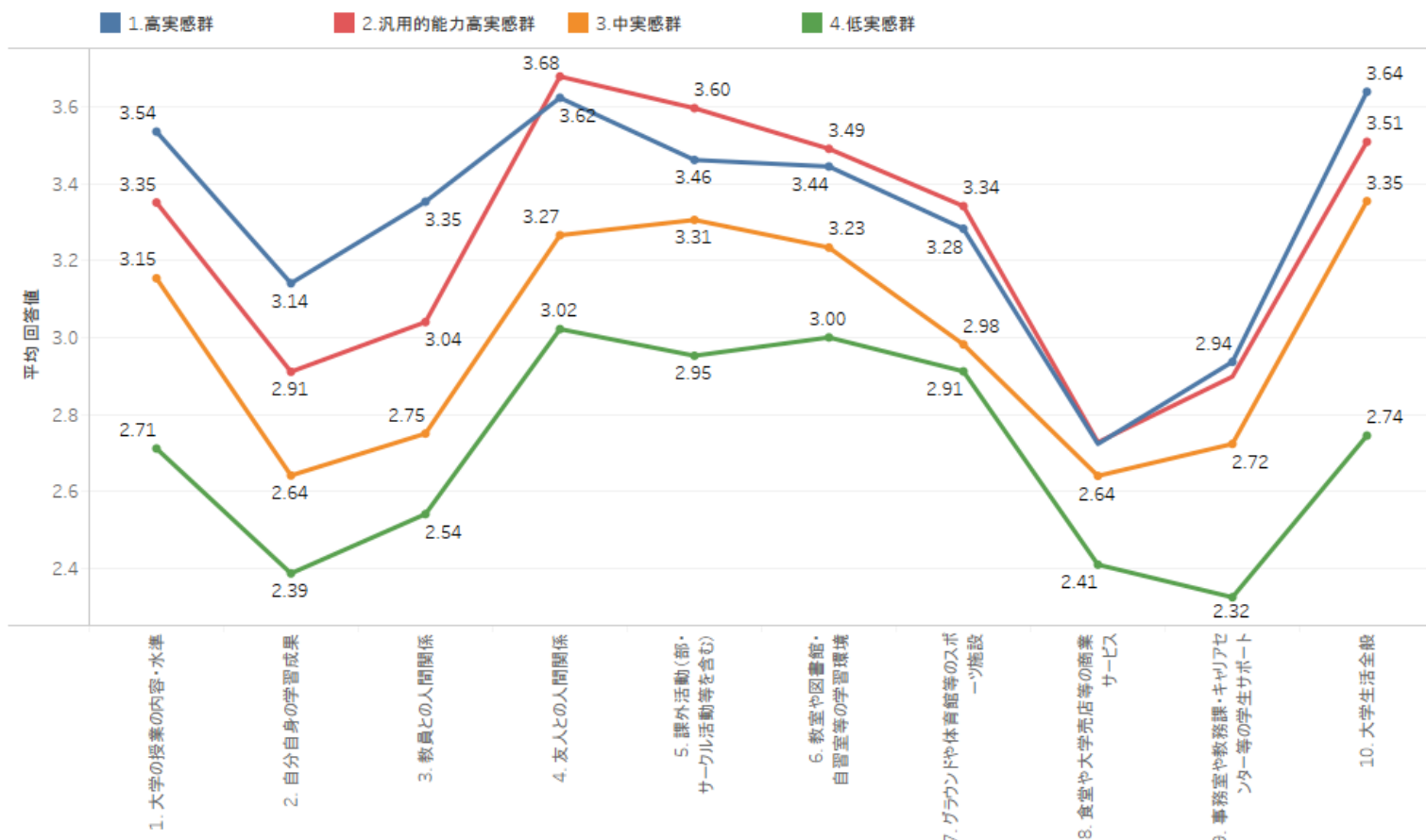


図 2-6-1 は、Q6 への群別の回答平均値をグラフ化したものである。

いずれの群間にも差がみられなかったのは、6.「教室や図書館・自習室等の学習環境」、7.「グラウンドや体育館等のスポーツ施設」、8.「食堂や大学売店等の商業サービス」であった。これらの学内の学習施設や商業サービスについては、学修実感との関連はみられなかった。

その他の項目においても、高実感群と汎用的能力高実感群の間では有意な差はみられなかった。高実感群と中実感群・低実感群の比較を見ていくと、1.「大学の授業の内容・水準」、2.「自分自身の学習成果」、3.「教員との人間関係」、4.「友人との人間関係」で、高実感群が他の2群よりも平均値が有意に高かった。また9.「事務室や教務課・キャリアセンター等の学生サポート」と10.「大学生生活全般」においては、高実感群と低実感群の間で差がみら

れ、高実感群の方が有意に高かった。

汎用的能力高実感群と中実感群で差がみられたのは 4.のみ、汎用的能力高実感群と低実感群で差がみられたのは 1、4、5、9、10.であり、いずれも汎用的能力高実感群の方が有意に高かった。

以上のことから各群についてまとめると、高実感群は学習面や教員・友人との人間関係、大学生活全般の満足度が高い群であるといえる。汎用的能力高実感群は、友人との人間関係と大学生活全般の満足度が高実感群と同程度に高く、学習面の満足度は高実感群と中実感群の中間である。中実感群は、大学生活全般の満足度は高いものの、学習面で高実感群より有意に低く、さらに友人との人間関係の満足度は汎用的能力高実感群と比べても低めである。低実感群は、学習面でも友人との人間関係でも満足が得られず、加えて大学の学生サポートや大学生活全般の満足度が低い。

このように、学修実感と大学時代の環境や学生生活への満足度は関連していることがわかる。

汎用的能力も、授業科目で身につく知識面の実感も高い高実感群は、学習面も含めて全体として満足度が高い。

汎用的能力高実感群では、友人との人間関係の満足度は高実感群と同様に高く、これは汎用的能力の中でも他者とのかかわりに関する能力と特に関連している可能性が考えられる。また、学習面の学修実感は中程度であっても、大学生活全般のという広い視点では高い満足度を得ることができており、この点は課外活動の満足度によるところが大きいのではないかと思われる。

また、学修実感が多項目にわたって低めな低実感群では、大学生活全般への満足度も目立って低くなってしまっていることから、学び方のサポートなど大学としての学修実感を高める支援は満足度を高める意味でも必要であると思われる。

2-7. 卒業直後の状況や仕事の内容と学修実感

本調査の Q8「あなたが大学を卒業した直後の状況として最もあてはまるものを1つ選んでください。」では、学部卒業直後の状況について、4つの選択肢で訊ねている。

図 2-7-1

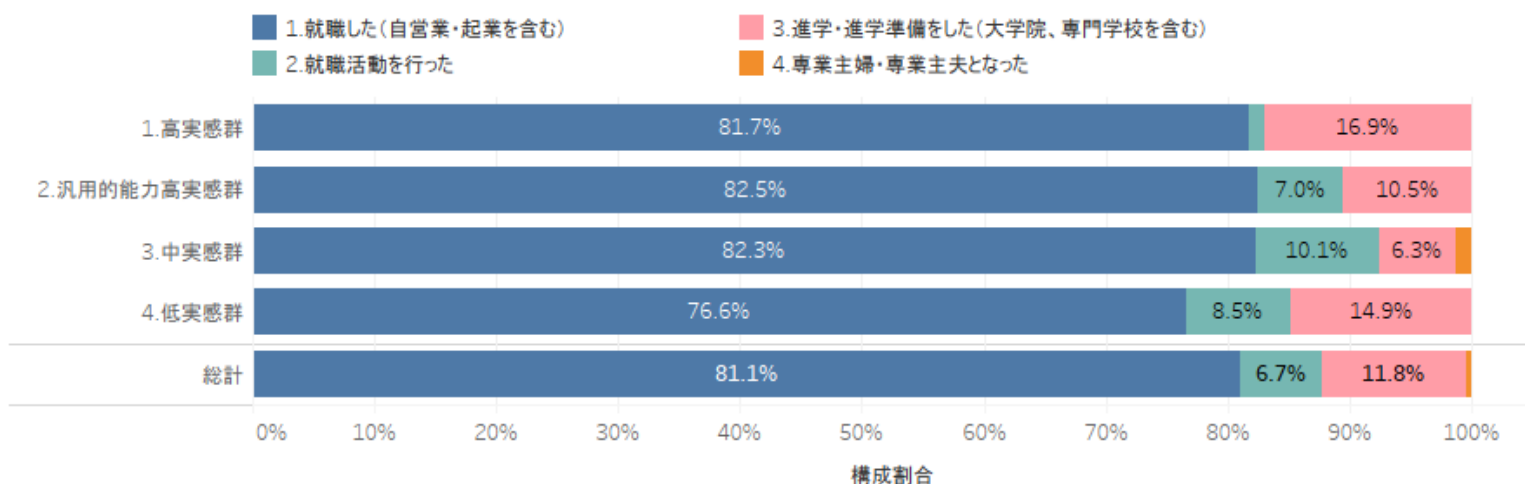


図 2-7-1 は、Q8 への群別の回答割合を示したものである。これを見ると、全体で 81.1% が就職し、11.8% が進学・進学準備をしていた。卒業直後に就職活動を行っていた卒業生は 6.7% で、専業主婦・専業主夫となったと回答した卒業生は 1 名であった。

群別に見て、高実感群で就職活動を行っていたと回答した卒業生が 1 名であった他は、就職、就職活動、進学・進学準備のそれぞれの状況にあてはまる卒業生は各群に同程度含まれていると見受けられる。

次に、本調査の Q8-2「あなたの大学卒業直後の仕事はどのような内容でしたか。」では、Q8 で 1.「就職した（自営業・起業を含む）」と回答した卒業生を対象に、卒業直後の仕事の内容を 12 項目に分け、4.とてもあてはまる～1.全く当てはまらない の 4 件法で訊ねている。これらの各項目で、群によって回答傾向に違いがみられるかを検討した。

図 2-7-2

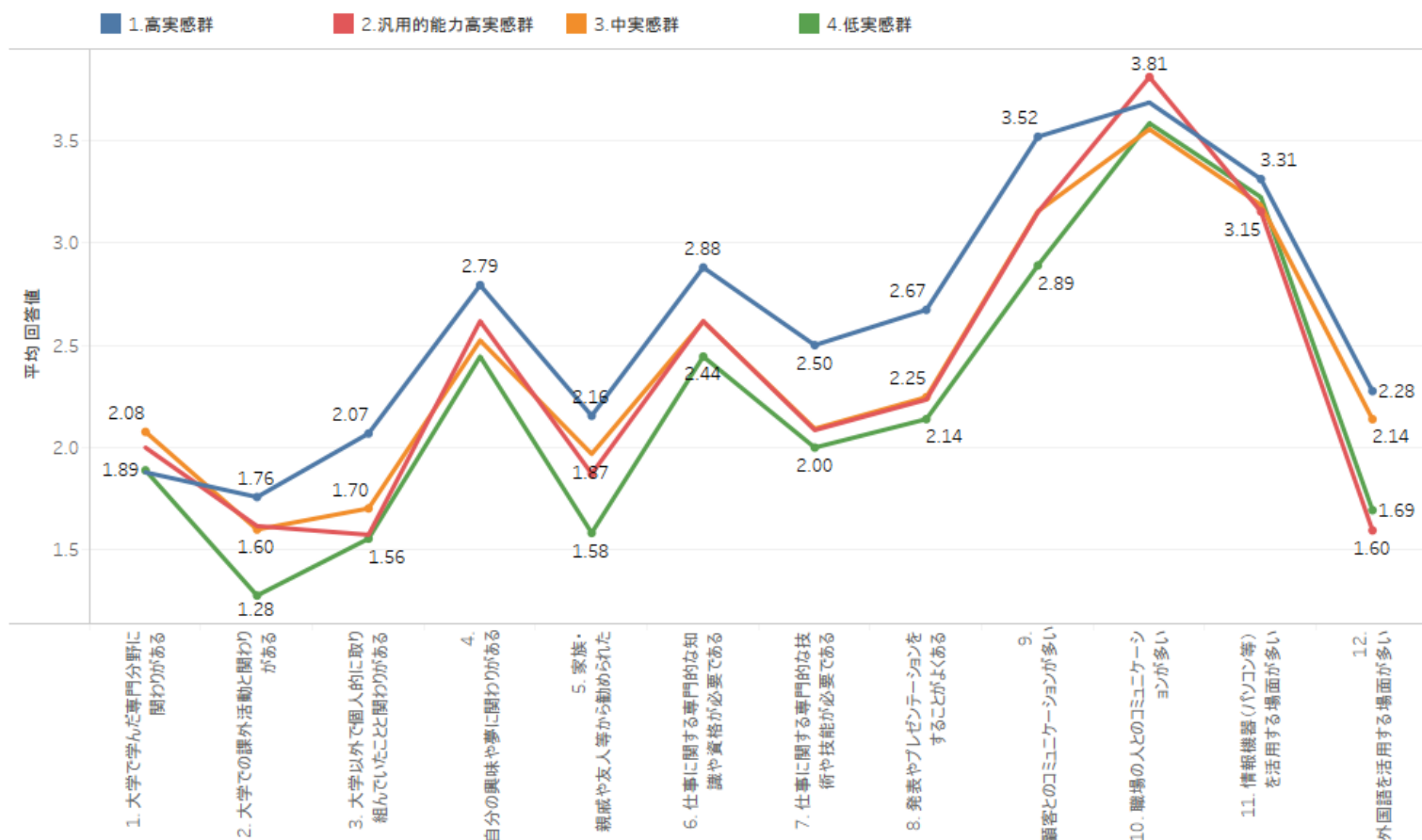


図 2-7-2 は、Q8-2 への群別の回答平均値をグラフ化したものである。

分散分析の結果、1.～11.ではいずれの群間にも差がみられなかった。12.「外国語を活用する場面が多い」では、高実感群の方が汎用的能力高実感群よりも有意に平均値が高かった。このことから、高実感群の方が汎用的能力高実感群より外国語を活用する場面が比較的多い仕事に就いたことが読み取れる。大学卒業時点で、外国語の運用能力の身についた実感が高実感群の方が高いため、高実感群の中には外国語を活用する可能性のある仕事を選んで選択した卒業生も一定数存在するのではないかと推察される。

2-8. 卒業5年後の仕事の内容と学修実感

本調査の Q9A「あなたの大学卒業直後から現在までの就業状況として、最もあてはまるものを1つ選んでください。」では、Q8で1.「就職した（自営業・起業を含む）」を選択した卒業生を対象に、学部卒業直後から現在までの仕事にまつわる状況の変化について、5つの選択肢で訊ねている。

図 2-8-1

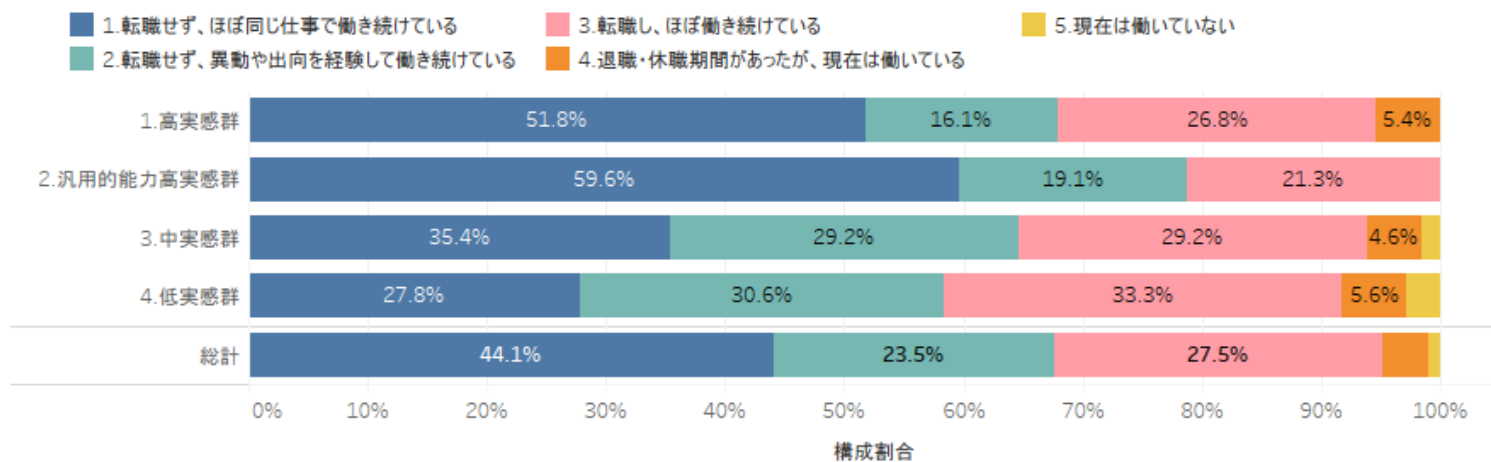


図 2-8-1 は、Q9A への群別の回答割合を示したものである。

これを見ると、4.「退職・休職期間があったが、現在は働いている」や5.「現在は働いていない」を選択した卒業生は少なく、全体では4.は3.9%、5.は1.0%であった。卒業と同時に就職してから、卒業5年後現在までに就業状況を含むライフステージの変化があったとみられる卒業生は5%程度存在していることになる。

また、多数を占める1.「転職せず、ほぼ同じ仕事で働き続けている」、2.「転職せず、異動や出向を経験して働き続けている」、3.「転職し、ほぼ働き続けている」について、群によって人数に偏りがあるかを確認したところ、全体的傾向に対して偏りのある箇所は見当たらなかった。この結果から、いずれの群にも転職経験がある卒業生が一定数存在することがわかった。異動や出向は、必ずしも本人の意志によるものではないことも多いと思われるが、その経験割合も群による違いはみられなかった。

なお本調査の Q9B では、Q8で1.「就職した（自営業・起業を含む）」以外を選択した卒業生を対象に、1.「その後、就職（自営業・起業を含む）し、現在も働いている」、2.「現在は働いていない」の2つの選択肢で現在の就業状況を訊ねており、そのうち卒業直後は就職以外の進路であったが現在就業している卒業生は95.8%、現在就業していない卒業生は4.2%であった。

次に、本調査の Q9-2「あなたの現在の仕事はどのような内容ですか。」では、異動・出向・転職の経験や退職・休職を挟んで働き続けている卒業生や、卒業直後は就職以外の進路であったが現在就業している卒業生を対象に、現在の仕事の内容を Q8-2 と同じ項目と選択肢を用いて訊ねている。すなわち、Q9A で 1.「転職せず、ほぼ同じ仕事で働き続けている」と回答した卒業生にはこの項目は訊ねていない。

ここでは、卒業 5 年後現在の仕事内容を全体的に検討するため、Q9A で 1.「転職せず、ほぼ同じ仕事で働き続けている」と回答した卒業生では Q8-2 を、Q9-2 に回答した卒業生では Q9-2 を用い、現在就業している回答者全員の現在の仕事の内容に関する回答を揃えた。このデータから、群による差がみられるかを検討した。

図 2-8-2

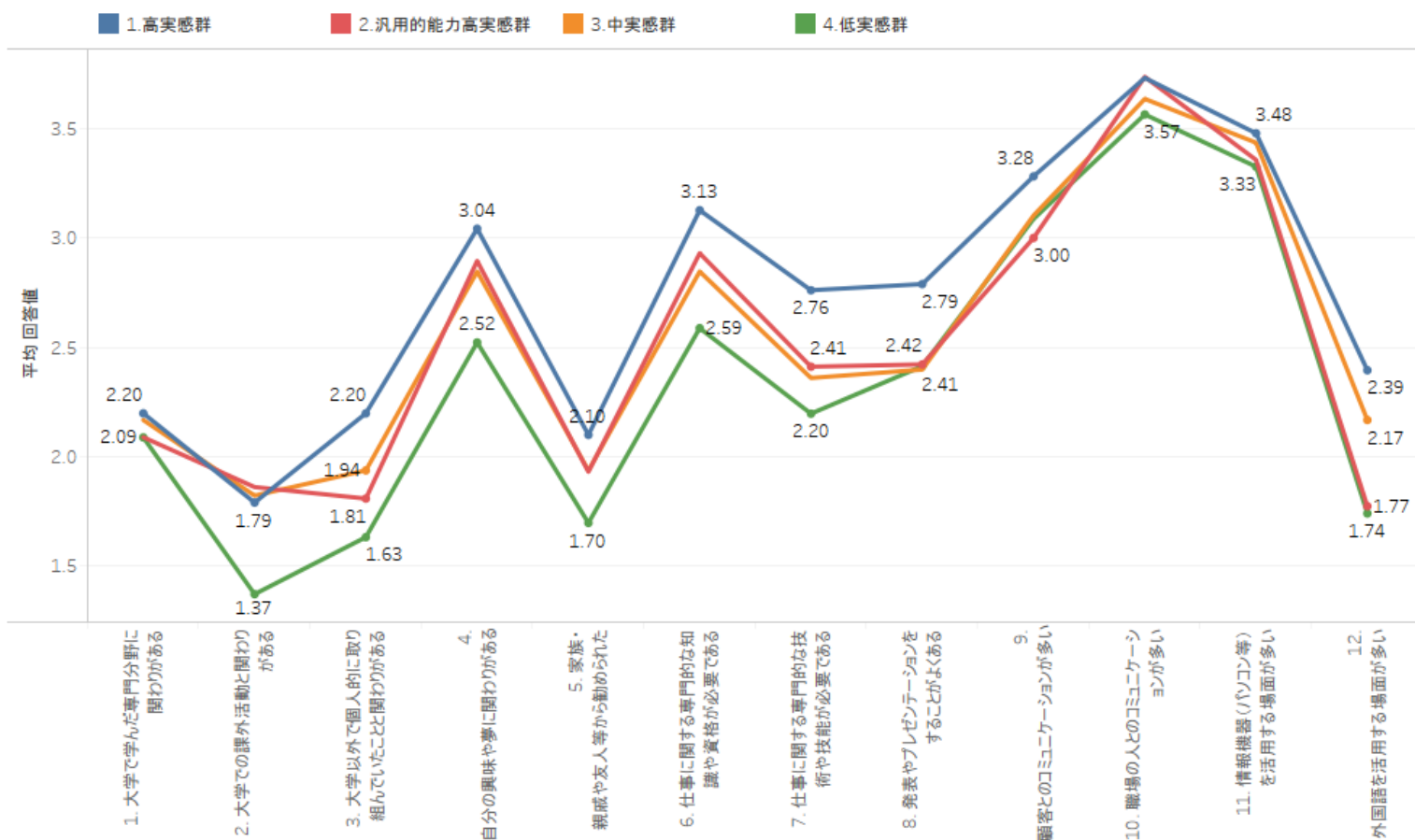


図 2-8-2 は、前記データによる群別の回答平均値をグラフ化したものである。

分散分析の結果、1.~11.ではいずれの群間にも差がみられなかった。12.「外国語を活用する場面が多い」では、高実感群の方が汎用的能力高実感群・低実感群よりも有意に平均値が高かった。高実感群の方が、汎用的能力高実感群や低実感群に比べて外国語を活用する場面が多いという以外には、本調査で訊ねた卒業 5 年後現在の仕事の内容については群間の違いがほぼみられず、卒業直後の仕事の内容を訊ねた Q08-2 と似通った結果であった。

図 2-8-3

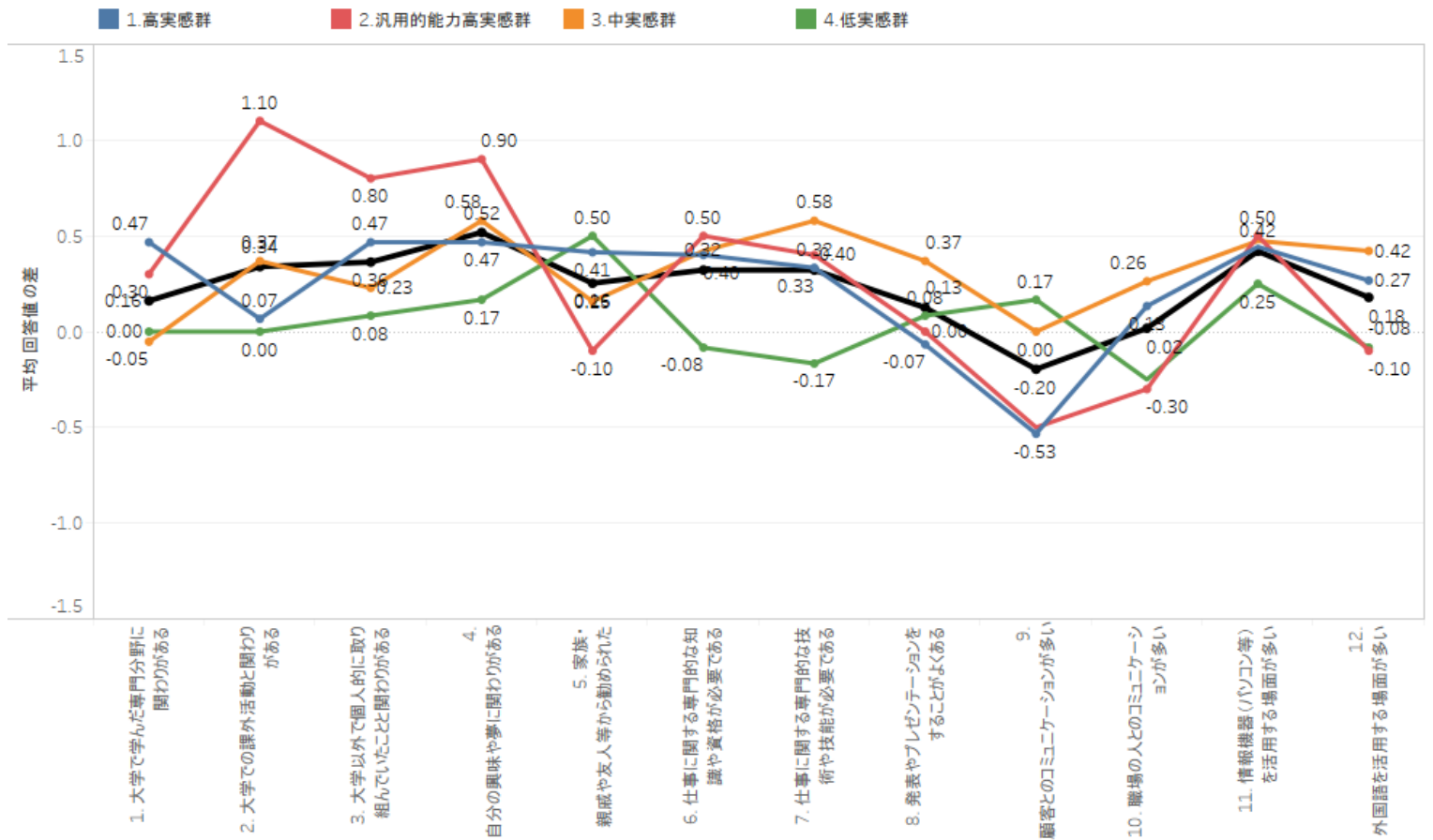


図 2-8-3 は、Q9A で 3.「転職し、ほぼ働き続けている」を選択した卒業生に絞って、現在の仕事の内容に関する各項目の回答平均値（Q9-2）から、卒業直後の仕事の内容に関する各項目の回答平均値（Q8-2）を引いた差をグラフ化したものである（黒線は全体の平均を示す）。各項目について、卒業直後から現在にかけての変化について、学修実感の群による違いがみられるかを検討した。

結果、学修実感の群によらず全体的に転職後の平均値が有意に高い項目として、2.「大学での課外活動と関わりがある」、3.「大学以外で個人的に取り組んでいたことと関わりがある」、4.「自分の興味や夢に関わりがある」、6.「仕事に関する専門的な知識や資格が必要である」、7.「仕事に関する専門的な技術や技能が必要である」、11.「情報機器（パソコン等）を活用する場面が多い」であった。また、2.では、汎用的能力高実感群の転職後の平均値の変化が特に大きいことが確認された。

このことから、転職を経験した卒業生は、大学時代の課外活動や個人的な活動、および自分の興味や夢との関わりがより深い仕事に就き、その専門性は知識や資格、技術や技能が必要とされること、また、パソコン等の情報機器をより活用するようになっていることがわかる。また、大学での課外活動との関連性が、汎用的能力高実感群で特に高まっており、この

群の卒業生は在学中から何らかの将来の職業とつながり得る課外活動を行っており、転職によってその関連性が深まったことが見受けられる。

2-9. 卒業5年後の仕事への満足度と学修実感

本調査のQ9-3「あなたは、現在の仕事についてどの程度満足していますか。」では、卒業5年後現在の仕事への満足度について6項目に分け、4.とても満足している～1.全く満足していないの4件法で訊ねている。これらの各項目で、群によって回答傾向に違いがみられるかを検討した。

図 2-9-1

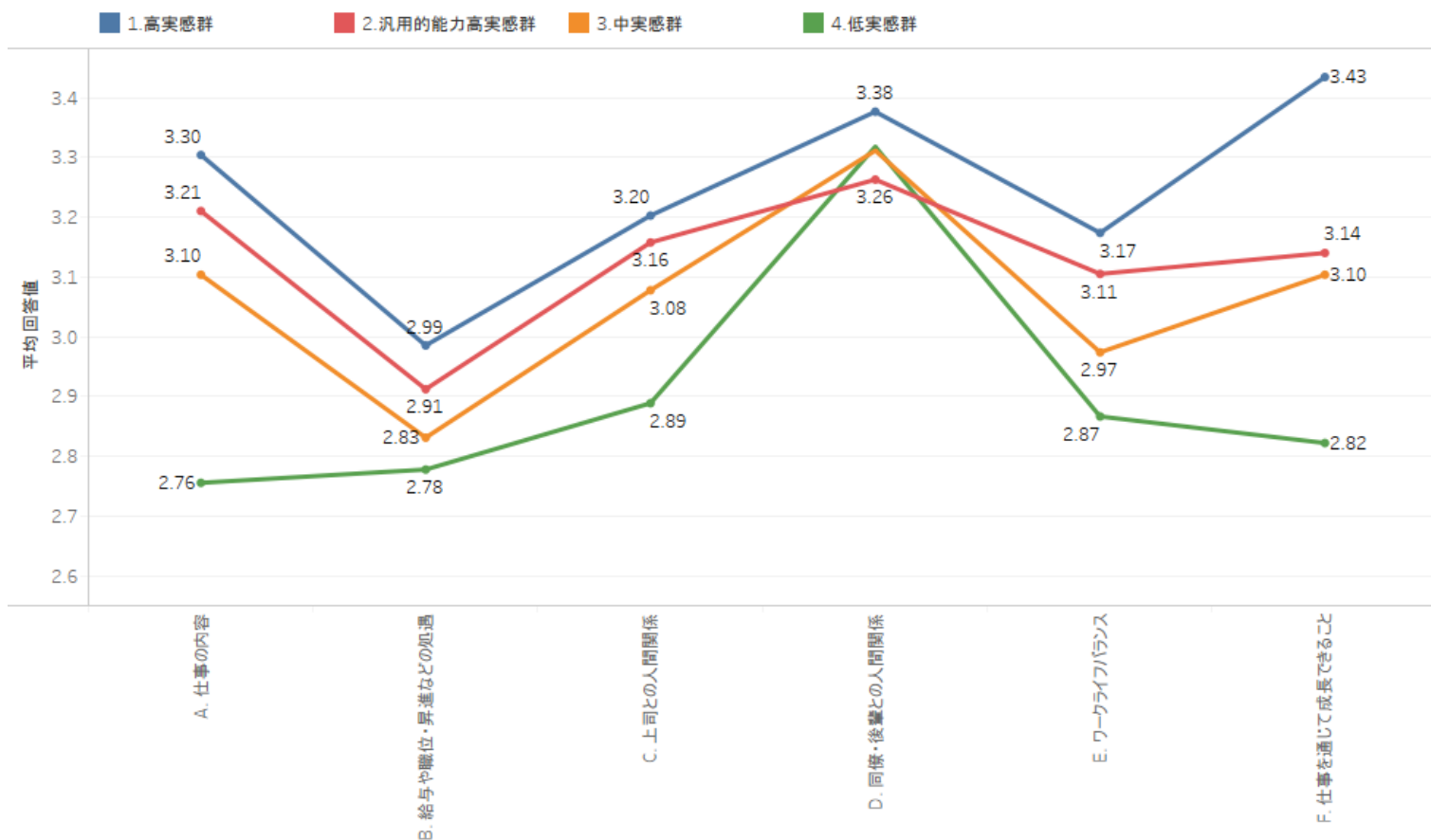


図 2-9-1 は、Q9-3 への群別の回答平均値をグラフ化したものである。

いずれの群間にも差がみられなかったのは、B.「給与や職位・昇進などの処遇」、C.「上司との人間関係」、D.「同僚・後輩との人間関係」、E.「ワークライフバランス」であった。A.「仕事の内容」とF.「仕事を通じて成長できること」については、高実感群と低実感群の間でのみ有意な差がみられた。

このことから、学修実感が高い卒業生は、学修実感が低い卒業生に比べて、卒業5年後現在の仕事について、「仕事の内容」と「仕事を通じて成長できること」に特に満足を得られていることがわかる。

2-10. 卒業後5年間で向上した能力・向上しなかった能力と卒業時の学修実感の関連

本調査の Q10 では、「大学卒業から現在までに、以下の知識・能力のうちで特に向上したと感じるものはありますか。」では、群分けに用いた卒業時の学修実感の設問 (Q5) と同じ 17 項目について、複数選択を可として卒業後5年間で向上した能力を訊ねている。

図 2-10-1

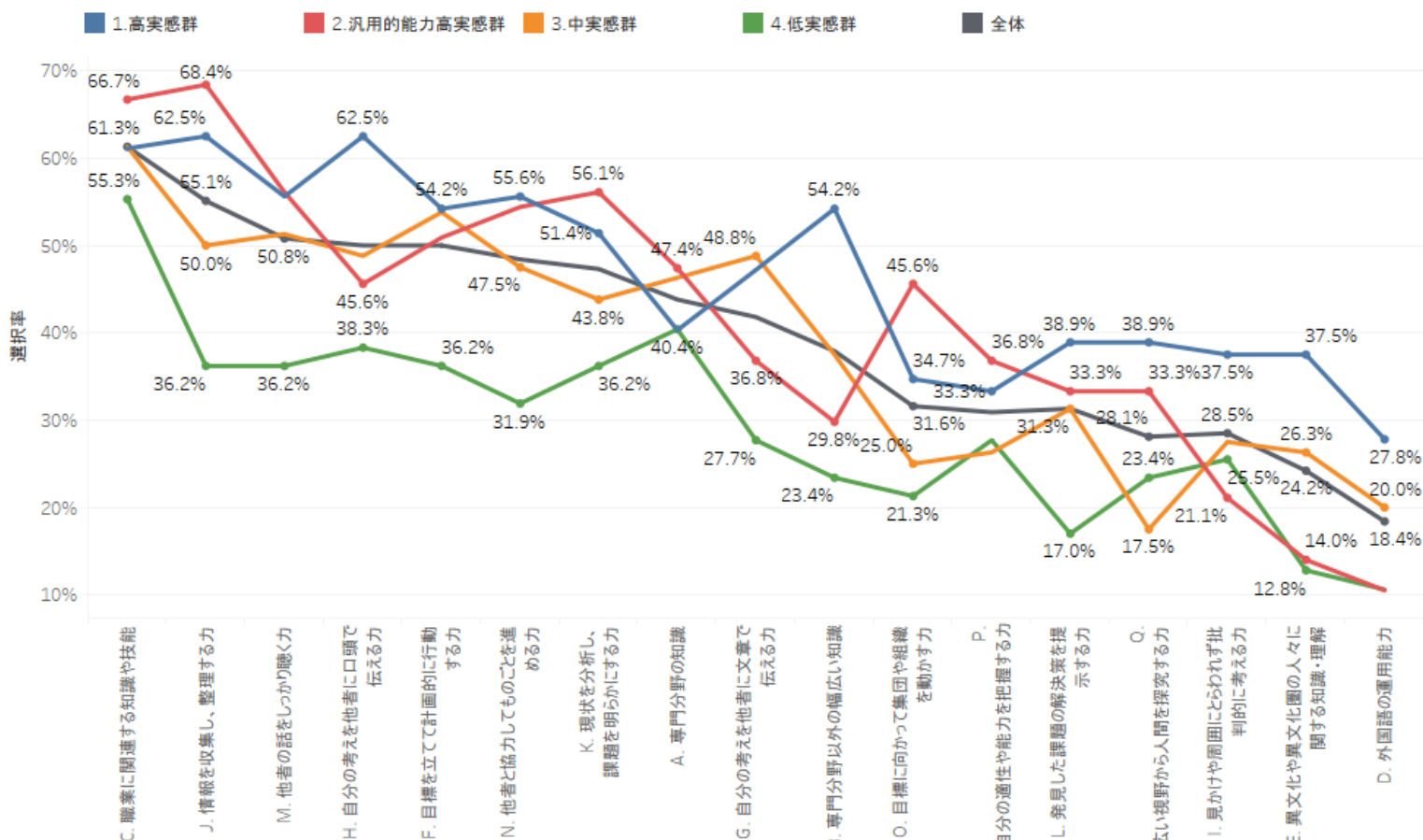


図 2-10-1 は、全体の選択率が高い順に項目を並べ替え、全体と各群の選択率をグラフ化したものである。

これをみると、まず、全体として選択率が高かった上位3項目は C.「職業に関連する知識や技能」、J.「情報を収集し、整理する力」、M.「他者の話をしっかり聴く力」であり、いずれも 50%を超えていることから、これらの知識・能力は卒業後の生活の中で向上したと感じる卒業生が多いことがうかがえる。反対に選択率が低かった下位3項目は、D.「外国語の運用能力」、E.「異文化や異文化圏の人々に関する知識・理解」、I.「見かけや周囲にとらわれず批判的に考える力」であり、卒業後にこれらの能力が高まったと感じる卒業生は少ないことがうかがえる。

また、群によって選択の有無に偏りがみられた項目は、J.、項 B.「専門分野以外の幅広い

知識」、E.であった。J.は全体の傾向に対して低実感群で選択率が低く、B.と E.は全体の傾向に対して高実感群の選択率が高い結果となった。

低実感群で卒業後に情報の収集・整理能力が向上したと感じる卒業生が比較的少ない点については、低実感群は卒業時点でもこの能力があまり身につけていないと感じており、また、学生時代の学び方も自覚的な工夫をあまりしてこなかった群であるため、仕事の中で情報の収集・整理の仕方を学習することが難しかった可能性が考えられる。

逆に、高実感群において専門分野以外の幅広い知識や異文化に関する知識・理解が深まった卒業生が多い点については、高実感群は学生時代に学びに対する意欲が高かったり、就いた職業で外国語を活用する場面が多いことなどから、仕事をしながら知識を深める範囲が広がったり、異文化と接する機会が多く、その過程で学習できている可能性が考えられる。

次に、本調査の Q11 では、「大学卒業から現在までに、以下の知識・能力のうちであまり向上していないものはありますか。」群分けに用いた卒業時の学修実感の設問 (Q5) と同じ 17 項目について、複数選択を可として卒業後 5 年間であまり向上していない能力を訊ねている。

図 2-10-2

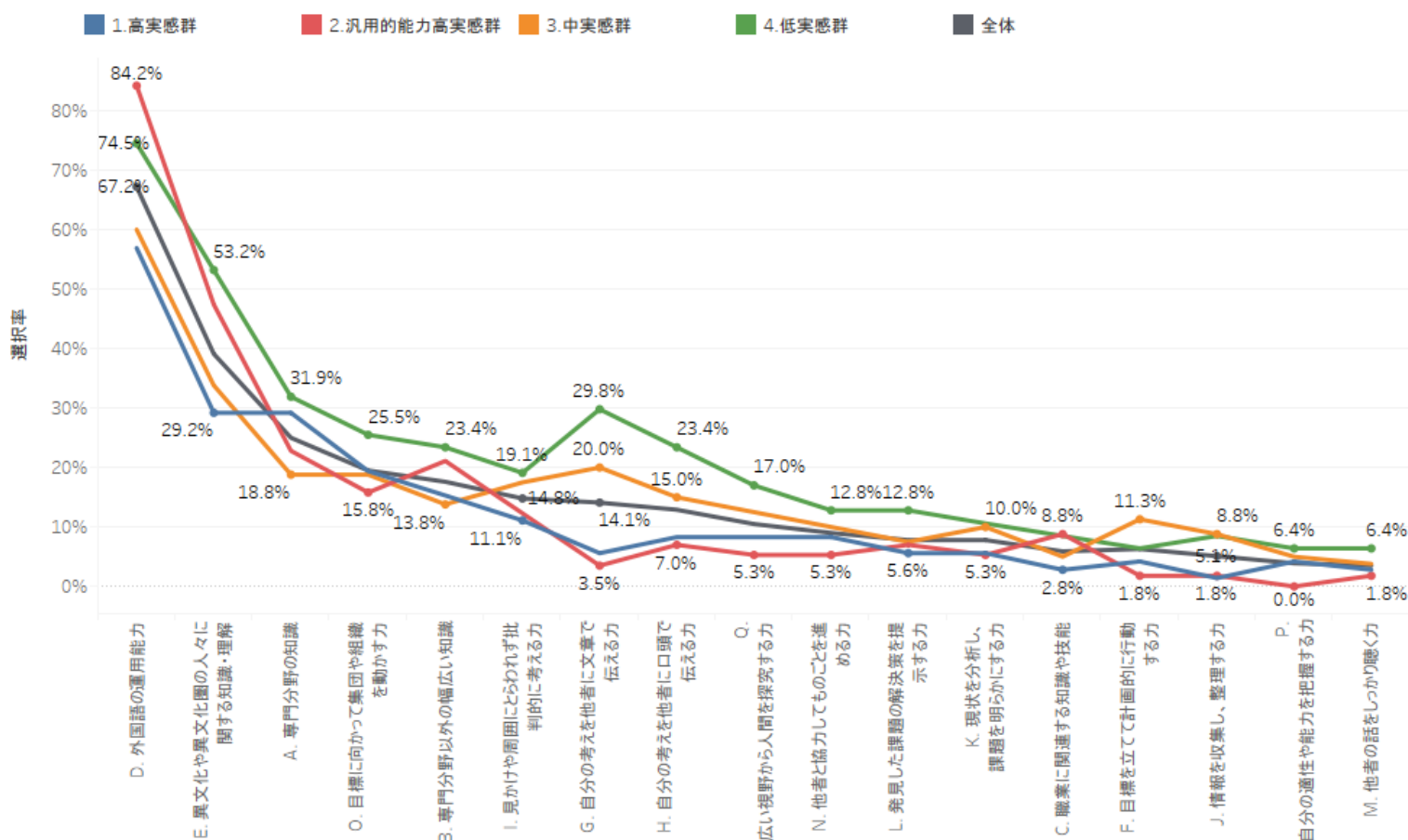


図 2-10-2 は、全体の選択率が高い順に項目を並べ替え、全体と各群の選択率をグラフ化したものである。

選択率が高いものから D.「外国語の運用能力」、E.「異文化や異文化圏の人々に関する知識・理解」、A.「専門分野の知識」の順であり、特に D.は 67.2%と多くの卒業生があまり向上していないと回答している。この点は、仕事上、外国語を活用する場面が多い卒業生はあまりいないこととの関連が考えられる。D.、E.、A.以外の項目は、選択率が 20%以下であり、多くの卒業生は選択しなかった。

また、群によって選択の有無に偏りがみられた項目は、D.と G.「自分の考えを他者に文章で伝える力」であった。D.では、全体の傾向に対して汎用的能力高実感群の選択率が高く、G.では、全体の傾向に対して低実感群の選択率が高く汎用的能力高実感群の選択率が低かった。汎用的能力高実感群は、仕事で外国語を活用する場面が比較的少ない群であるため、外国語の運用能力があまり高まっていないと感じる割合が多いことは頷ける。また、自分の考えを文章で伝える力における選択率の違いは、本調査においては学修実感と関係があるのではないだろうか。自分の考えを文章で伝える力は、大学においてはレポート課題や卒業論文等を通じて特に鍛えられる能力であると考えられるが、この学修実感が特に低かった低実感群はその基礎に乏しいことから、卒業後にこの能力を伸ばしていくことができないと感じる卒業生の割合が比較的多いのかもしれない。

3.まとめ

本章における分析をまとめると、以下のことがわかったといえる。

まず、卒業した学部による違いについては以下のようにまとめられる。

1. 文学部の卒業生は、学科の専門分野の知識、外国語の運用能力、異文化への知識や理解、自分の考えを他者に文章で伝える力が身についた実感を他の学部の卒業生より高く得られている傾向があった。
2. 汎用的な能力については、卒業した学部間の違いはみられなかった。

次に、卒業時点の学修実感による違いについては、以下のようにまとめられる。

3. 入学時に影響を受けた内容について、
 - ・卒業時の学修実感が全般的に高い卒業生は、入学時に学びたい学部・学科があるという点に比較的強く影響されていた。
 - ・卒業時の学修実感が全般的に低い卒業生は、入学時に教授・講師陣や、社会で役立つ教養が身に付くことへの期待が薄かった。
4. 大学時代の各種活動に対する意欲について、
 - ・学修実感が全般的に高い卒業生と比較して、実感の差が広がるほど、意欲に差が現れる科目や学習活動の種類も多くなっていた。
 - ・課外活動やアルバイトなどへの意欲には、学修実感の高低との関連性はみられなかった。
5. 大学時代の学び方について、
 - ・学修実感が全般的に高い卒業生は、調査で訊ねた学び方全般を自覚的に行っていた。
 - ・汎用的能力の実感が高い卒業生は、課題や試験へは計画的に取り組んでいたが、その他の学び方にはあまり自覚的ではなかった。
 - ・学修実感が中程度あるいは全般的に低い卒業生は、学び方全般に対し、しっかりと行っていた自信の持てていないグループであった。
6. 大学生活への満足度について、
 - ・学修実感が全般的に高い卒業生は、学業面や教員・友人との人間関係に対して高い満足を感じていた。
 - ・汎用的能力の実感が高い卒業生は、友人との人間関係については高い満足を感じていた。
 - ・学修実感が中程度の卒業生は、満足度も中程度の項目が多いが、大学生活全般には高い満足を感じていた。
 - ・学修実感が全般的に低い卒業生は、満足度も多くの項目で低く、大学生活全般への満足度も低かった。

7. 卒業直後の状況について、
 - ・就職や進学割合や、卒業直後の仕事の内容には、学修実感の違いによる差はみられなかった。
 - ・学修実感が全般的に高い卒業生は、外国語を活用する場面が多い仕事に就いている者が多い傾向があった。
8. 卒業5年後時点の仕事の内容について、
 - ・学修実感の違いによる大きな違いはみられなかった。
 - ・学修実感が全般的に高い卒業生は、外国語を活用する場面が多い仕事に就いている者が多い傾向があった。
 - ・転職を経験した卒業生は、大学時代の課外活動や個人的に取り組んでいたこと、および自分の興味や夢との関わりがより深い仕事に就いていた。
 - ・転職後の仕事では、学修実感の高低に関わらず、仕事に関する専門的な知識や資格、技術や技能がより必要で、情報機器を活用する場面が多くなっていた。
9. 卒業5年後の仕事に対する満足度について、
 - ・給与などの処遇、上司や同僚との人間関係、ワークライフバランスには学修実感による違いはみられなかった。
 - ・仕事の内容と、仕事を通じて成長できることについては、学修実感が全般的に高い卒業生の方が全般的に低い卒業生よりも高かった。
10. 卒業後5年間の知識や能力の変化について、
 - ・職業に関する知識、情報を収集し整理する力、他者の話をしっかり聴く力は向上したと感じる卒業生が多かった。
 - ・卒業時点の学修実感が全般的に高い卒業生は、専門分野以外の幅広い知識と異文化への知識・理解も向上したと答える割合が高かった。
 - ・外国語の運用能力は、向上していないと回答する割合が高かった。

以上を踏まえると、卒業時点での学修実感が全般的に高かった卒業生は、学びたいという意志を強く持って入学し、学び方にも自分なりの工夫をして意欲的に大学生活に臨んでいたことがうかがえる。卒業5年後現在も、仕事の内容や仕事を通じて成長できることに満足しており、卒業後も能動的に学び続けていると思われる。

汎用的能力の学修実感が高かった卒業生は、課題や試験には計画的に取り組んでいたが、必ずしも学び方に積極性があったとはいえない部分があり、この点が専門分野の知識や外国語の能力の学修実感が高くないことと関係していると思われる。しかし、大学生活への満足度はおおそ高く、自らの学生時代に納得していることもうかがえる。卒業5年後の現状にも満足感をもっている。

学修実感が全般的に中程度であった卒業生も、汎用的能力の学修実感が高かった卒業生とほぼ同じ傾向の学び方だったといえるが、課題や試験への取組みに計画性が欠けていた

様子がうかがえ、あまり積極的に学習していたようには見えない。このことと、大学生活全般の満足度は高いものの、学習面や友人との人間関係の満足度が低めであることは、関係しているように見受けられる。しかし、卒業5年後の現在の仕事への満足度は低くない。

学修実感が全般的に低かった卒業生は、入学する時点から大学への期待が薄かった可能性があり、在学中の学び方も積極的ではなく、授業科目やその他の学習活動への意欲も低かった。結果として大学生活への満足度は全般的に低い。これらは、卒業5年後現在の仕事の内容や仕事を通じて成長できることに対する満足度の低さとも関係していると思われる。卒業後5年間の知識・能力の変化をみても、他の群と比べて向上したと感じられていない様子がうかがえる。このように、大学時代に留まらず、自分の学びや意欲、成長についてネガティブに捉える傾向が継続しているように見受けられる。いずれかの時点でポジティブな面を見出し、学びに対して積極的になる機会があれば、学修実感も高まるのではないかと思われる。

大学における学修実感が低いことは、現在振り返って本学への満足度が低いこと、また卒業後も成長を実感できないことと関係しており、本人にとっても本学にとっても良い結果とは言い難い。本調査では、こういった高い学修実感を得られずに卒業していく学生は、入学時に大学に対して具体化された期待を持っておらず、在学中の自らの学び方や学習意欲についても自己評価が低いことがわかった。入学時や在学中を通してこの点を支援し、積極的な学びの動機づけができれば、自己評価としての学修実感やひいては本学への満足度も向上が期待できると考えられる。

例えば、

- ・高校生が本学でどんなことがどのように学べるのかをより深く知り、期待を高めることができる広報活動や入学前プログラムの充実
- ・初年次に、これから学ぶ専門分野への興味を広げられるよう、学際領域を取り入れるなどのカリキュラムや授業の工夫

などが挙げられるだろう。

加えて、大学における学び方を身につけ実行するための伴走型支援を適切に組み入れていくことで、自発的な学習を習慣化し、卒業後の人生における学びの継続と満足にも資することができると思われる。